

靖国偕行文庫

春山 明哲

靖国神社に図書館がある、このことは意外に知られていないのではないだろうか。

神社といえば鬱蒼とした森を連想するが、靖国神社はご存知のように九段の高台にあって、とても開放性のある「空が広い」という印象の境内である。とはいえ、神社の境内のどこに図書館があるのだろうか。

大村益次郎の銅像からまっすぐ進むと正面に拝殿が見えてくる。拝殿を正面に見て一礼し、やおら右手に首をめぐらせると奥のほうに遊就館が見える。ガラスの壁面を眺めながら石畳を歩いて行くと広場に出る。と、向かって左手にお城の櫓にやや似た感じの建物が眺められる。この建物は昭和9年4月に落成した遊就館付属「国防館」で、帝冠様式または

近代東洋式というらしい。これが靖国会館である。数段の石段を登ると玄関で、「靖国偕行文庫」の文字版が掲げられている（「靖国」は正式には「靖國」である）。大きなガラス扉を入ると事務室があり、その右側が閲覧室になっている。

まず、文庫室長の白石博司さんに伺ったお話と『靖国偕行文庫の葉』などの資料を総合して、靖国偕行文庫のあらましをご紹介します。

靖国偕行文庫が開設されたのは、平成11年10月のことである。文庫の名称が「靖国」と「偕行」とから成っていることに表象されるように、この文庫は二つの資料的な源泉を持っている。ひとつは靖国神社が所蔵していた資料で、戦没者の遺族、戦友などから寄贈（これを「奉納」という）された図書等のコレクショ



靖国会館全景

ンである。いまひとつは、偕行社が収集していた軍事関係を中心とするコレクションである。偕行社は明治 10 年 (1877) に設立された陸軍将校の集会所にその起源があり、昭和 32 年に旧陸軍関係の戦争犠牲者の福祉増進と会員の親睦を目的として発足した財団法人である。この活動の中で会員の著作による戦記など、軍事関係を中心に多くの資料が収集されていた (詳しくは偕行社のウェブサイト参照 <http://www.kaikosha.or.jp/>)。

開館当時の資料保有数の統計を見ると、靖国神社由来の資料が 15,700 冊、偕行社由来が 35,370 冊で、合計 51,070 冊となっており、現在は約 10 万冊にまで増加している。分類は、日本十進分類法を基本としているが、国防軍事 (390) については、防衛省作成の分類表のほか、文庫独自の区分も設けているとのことである。例えば、「396.5i025」は、「396」が陸軍部隊・学校史、その展開で歩兵 25 聯隊史を表す、といった具合で、陸軍の制度を知る利用者にとって実用的な分類になっている。この分類によれば、当初保有の 51,070 冊のうち、国防軍事は 36,520 冊で、全体の約 72% を占めている。所蔵資料の一例を挙げれば、明治 21 年創刊以来の『偕行社記事』(普通号、臨時号、附録、特報等のほぼ全巻)等の軍事関係雑誌、『明治三十七八年戦役陸軍衛生史』全 15 巻等の戦史、陸海軍の部隊史、士官学校や幼年学校の同期会誌、さらには、安藤利吉資料、上原勇作所蔵資料など軍将官の関係文書などが挙げられる。靖国偕行文庫は、日本近代の軍事史分野を中心とし、関連

の政治、外交、歴史、神道関係を所蔵する専門図書館といってよいだろう。

さて、靖国偕行文庫の利用者サービスの概要を記しておこう (詳しくは、靖国神社のウェブサイトから「靖国偕行文庫」のページをご覧ください <http://www.yasukuni.or.jp/annai/bunko.html>)。

文庫は一般公開されており、とくに資格とか紹介が必要ということはない。開館時間は午前 9 時 30 分から午後 5 時まで、毎週月曜・木曜が休館日、つまり週末の土曜・日曜と平日の火曜・水曜・金曜が開館日となっていて、平日勤務の利用者にとっては休日が有効に使えるメリットがある。館内閲覧が原則だが、コピー・サービス (1 枚 20 円) も受けられる (靖国神社崇敬奉賛会会員は貸出ができる)。所蔵資料の目録データベース (業務用) があり、冊子体の閲覧用目録が利用できるほか、資料の検索などレファレンス・サービスも行っている。平成 17 年度の利用者は約 5,500 人で、前年度よりも 4 割以上も増加している。

白石文庫室長さんのお話では、スタッフは 4 名、資料の収集は購入のほか、最近寄贈が非常に増えて整理がなかなか



靖国偕行文庫の閲覧室

大変だが、蔵書は充実してきたという。平成 18 年の新規受入図書は 7,600 冊を越えている。利用者のプロフィールとしては、戦友会や遺族関係の方々はもとより、歴史の研究者、論文作成をめざす大学院の学生、新聞・放送等のマスコミ関係者、近代史に関心を持つサラリーマンなど、広い層に利用者が広がってきた印象がある、とのことであった。最近では、クリント・イーストウッド監督の映画『父親たちの星条旗』『硫黄島からの手紙』が上映されたこともあって、硫黄島の戦史関係の資料を調べに来る方も多いか。

さて、本誌の読者には、靖国偕行文庫の「源流」ともいべき「奉納図書館」について筆を及ぼしておくべきだろう。靖国神社が明治以降の近代日本の「超ハイカラな東京名所」であったことは、坪内祐三氏の『靖国』（新潮社、1999 年。新潮文庫所収）に活写されているが、残念ながらこの図書館のことは述べられていない。それもそのはずで、明治 43 年 7 月 16 日、紆余曲折の末やっと開館した「純私立」の公共図書館は、大正 12 年の関東大震災で大破し、ついに復興しなかったからである。その間、わずか足掛け 14 年の短い命であった。しかし、明治維新の功業を記念する歴史専門図書館としての稀有なビジョンがかつてあったことは、史実としてとどめておくべきだろう。

明治 35 年 12 月 1 日、子爵林友幸から海軍大臣山本権兵衛と陸軍大臣寺内正毅に宛て「靖国神社へ図書館奉納願書」なるものが提出された。それによると、故西郷侯爵、東久世伯爵等と相談し、「野史台」（やしだい）創立以来 17 年の間に収集してきた史料を基に「歴史図書館」を建設しようと計画してきたが、こ

れを神社の付属施設としてその「保存ノ安全ヲ永遠ニ期スル」とともにこれを「公衆縦覧ノ便益ニ資スル」ために、「一ノ図書館ヲ設立シ、多年蒐集シタル史料及び大方諸家寄贈ノ約アル図書・物品等ヲ合セ部分類別之ヲ館中ニ并列シテ、以テ同神社ニ奉納仕度志願ニ有之候」というのである（『靖国神社百年史 資料篇（中）』111 ページ以下「奉納図書館」の項による）。

ところで、「野史台」とはなんだろうか。この願書の付属の「御参考書」には、「野史台ノ事業ハ嘉永癸丑米艦渡来ヨリ明治昭代ニ涉リ、殉難勲臣ノ事蹟ニ関スル図書・物品ヲシテ悉ク採集網羅シ、後世へ保存スル目的」で開始されたとある。野史台の事業としては、明治 20 年から 29 年にかけて、『維新史料』全 182 編を和装・活版で刊行しており、『野史台維新史料叢書』全 40 巻（日本史籍協会編、東京大学出版会、1972～1974 年）として復刻されている。また、維新関係の伝記資料も刊行している。残念ながら、この事業の記録あるいは研究の類をまだ見出していないのだが、前記の叢書からうかがい知る限りは、明治の大規模な歴史編纂・史料収集事業であったようである。

さて、野史台主任の富岡政信の「御参考書」には、図書約 3 万部（維新史料・戊辰戦記絵巻物・奉公偉績画卷その他の文書）、物品約 500 種とあり、建設費 3 万円、備品費 2 万円の見積もりも示されている。陸海軍及び靖国神社はこの願書を承認し、遊藝館の東北に独立の建物を建設することにした。ところが、図書館建設の中心人物であった林友幸が明治 41 年に亡くなり、孫の博太郎が遺志を継いだのだが、資金その他の条件整

備に困難を来たし、計画は縮小せざるをえなくなった。それでも、明治42年11月、煉瓦石造二階建総坪140坪の図書館が完成し、翌43年5月には「奉納図書物品目録」、室内家具、開館準備資金も納められ、7月16日開館の運びとなったのである。このとき、奉納図書館発起人に名を連ねていたのは、伯爵大隈重信、伯爵東久世通禧、侯爵蜂須賀茂韶、伯爵土方久元、伯爵林博太郎、子爵黒田清綱、そして奉納事務主任富岡政信の面々であった。もって、この図書館建設の志が那邊にあったかを想像しえよう。

このようにやっと設立に漕ぎ着けた図書館であったが、先に述べたように関東大震災で施設、資料とも大きな被害を蒙

り、再建されることなく終わった。ただ、被災を免れた資料は「遊就館文庫」として保管され、現在は靖国偕行文庫の貴重書室に保存されている。奉納図書館の建築図面は一部現存し、また、平成14年に完成した遊就館の増改修工事の際には、図書館の煉瓦造の基礎部分が出土したという。

靖国偕行文庫は、このような近代日本の歴史の一齣を刻んだ、そして、近代史のユニークな専門領域の図書館であり、神域の静謐さを感じながら資料に目を通す経験が味わえる空間でもある。

(はるやま めいてつ 調査及び立法考査局文教科学技術調査室)